



Ikki Island  
Nagasaki Iki-ri

もう一度、会いたい



# 「鬼凧」を守り続ける

齊藤あゆみさん

壱岐では初節句やお祝いの際に「鬼凧」を贈る風習がある。島で唯一の鬼凧づくりの職人だった平尾明丈さんの技術を継いだのは、孫の齊藤あゆみさん。六年ぶりに会う彼女は、母になつていった。腕に抱かれた小さな女の子の笑顔がなんとも愛らしい。

前回の取材時には「ただただ必死に作っている」と話していた彼女だが、その技術は確実に向上していた。以前はしっかりと描いていた下書きも薄くなり、最近では、下書きの線通りではなく、その時の気持ちで筆を走らせることができるほどに余裕が生まれたという。

二年前には工房を新しくし、観光客向けの絵付け体験も積極的に行っている。「鬼凧は基本、食紅を使って色付けしますが、小さい子には絵の具やクレヨンを使ってカラフルに仕上げてもらいます。とにかく皆さん楽しんでいただけることを考えていますね」。

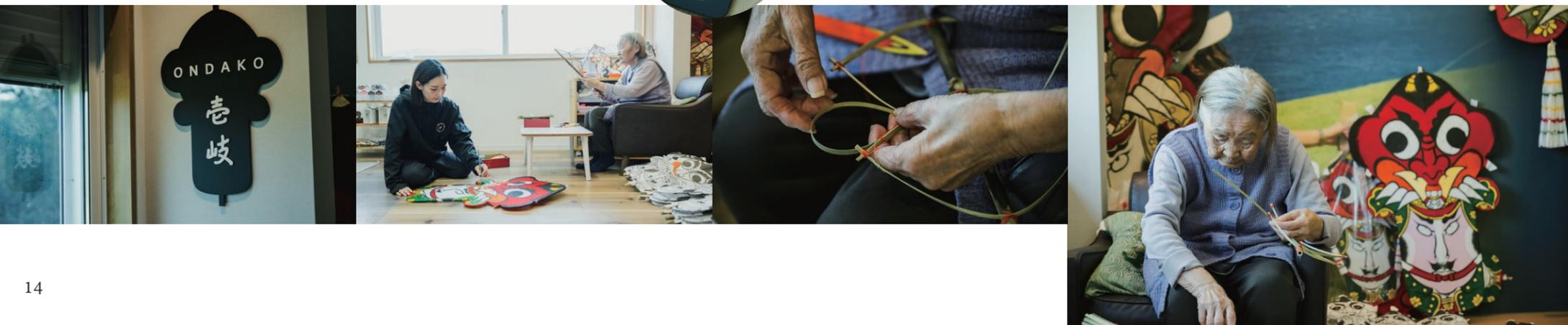
技術面だけでなく、ものづくりに対する心境の変化もあったようだ。「最初は祖父と祖母がつないできた鬼凧を途絶えさせたくないという思いで継承しました。その気持ちは今も変わりませんが、最近は伝統工芸に触れる機会の少ない若者に鬼凧を知ってもらうための工夫を、より強く考えるようになりました」。あゆみさんは、鬼凧をモチーフにしたステッカーや缶バッジ、Tシャツなどを製作し、SNSで発信することで、若い人の認知度を高める努力を続けている。

しかし結婚し、母になり、制作時間は制限されるようになった。鬼凧づくりは、子どもが寝ている間に進めるといいう。「それでも壱岐は、子育てがしやすいですね。自分が生まれ育った町ですから、顔見知りも多く、地域の中で子どもを育てられる安心感があります。また、島内の飲食店や施設を訪れた際、鬼凧が飾られているのを見て、娘が指を指して笑っているのを見ると、嬉しくなりますね」。

そこには、強くて優しい母の姿があった。

過去の齊藤さん紹介記事！  
ni-ko-ri  
No.51

あゆみさんの鬼凧づくりを手伝う祖母のフクヨさん



# もう一度、会いたい

齊藤あゆみさん

あ ゆみさんには、二人の強い味方がいる。祖母のフクヨさんと、母の明香さんだ。フクヨさんは御年九十三歳ながら、あゆみさん顔負けのスピードで竹を編み、鬼凧づくりをサポート。また幼稚園教諭の資格を持つ明香さんは、育児を手助けしている。

明香さんがあゆみさんへの思いを話してくれた。「幼い頃から、ものを作るのが好きな子でした。でも、まさか私の実家の家業を継ぐとは思っていませんでした。父と母が守ってきた鬼凧をつないでくれることを頼もしく思いますし、我が子ながら感心して見守っています。また出産後は気持ちも穏やかに、芯のようなものができてきたと感じています。若い人に鬼凧を知ってほしいと思うようになったのも、親になったことで、未来を考えるようになったからかもしれませんね」。

あゆみさんは、島の若い職人たちと情報共有をしたり、地元の小学校まで出向いて絵付け体験をしたりするなどして、鬼凧の魅力を伝えようとしている。もちろん、観光客も増やしたい。「壱岐には昔から鬼伝説が伝わっていて、島には『鬼の足跡』や『鬼の窟古墳』などの名所がたくさんあります。私は鬼凧をきっかけにそうした島の歴史を知ってもらい、壱岐を訪れてくれた人たちに心に残る深い旅をしてほしいと願っています」。

あゆみさんが継いでいなければ、伝統工芸だけでなく、壱岐の風習そのものが途絶えていたかもしれない。彼女が祖父から受け継いだものは、島を想う心であり、未来であった。



壱岐  
Iki Island

4世代の温かな絆が鬼凧の継承を支えている。



幼い頃から訪れていたという清石浜海水浴場は、あゆみさんの好きな場所でもある。